様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 １１ 日現在

機関番号：１４２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１４００６

研究課題名（和文）生態想像力を育む幼児期の持続発展教育についての実践理論の構築

研究課題名（英文）Construction of a practical ESD theory cultivating young children's ecological imagination

研究代表者
山本　一成（Yamamoto, Issei）

滋賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０７３７２３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、幼児期の生態想像力の涵養を柱とした実践的なＥＳＤ理論の構築を行った。幼児期の生態想像力を「生きているものどうしのつながりへの想像力」として位置づけ、ＥＳＤを、保育者と子どもが多様なものと「生きているものどうし」として出会い、生命や環境への理解を深める過程として捉えなおした。さらに、そのような身近な環境との出会いを通したＥＳＤ実践を支援するツールとして、生態想像力の広がりを可視化する手法が開発された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
哲学や環境人文学の分野で構築されてきた「生態想像力」の理論的枠組みを拡張し、幼児期のESDの実践理論へと発展させた。持続可能な社会づくりへ向けた幼児期の教育実践の在り方が模索されるなかで、身近な生命や環境と出会い、出会いについて省察しながら生態想像力を広げていくひとつのモデルが示された。また、支援ツールの開発を行ったことによって、ESD実践を行う保育者が理論と実践を架橋していくための手がかりが提示された。

研究成果の概要（英文）：This research constructed a practical ESD theory cultivating children’s ecological imagination. The theory reconceptualized ecological imagination as ‘the imagination for connection between lives,’ ESD as a process to produce teachers’ and children’s encountering with accompanying lives and to enhance understanding of these lives and environments. In addition, we developed a supporting tool for ESD which visualized the expansion of ecological imagination.

研究分野：臨床教育学

キーワード：保育　幼児教育　生態想像力　ＥＳＤ（持続発展教育）　生きていること　環境　出会い

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

## １．研究開始当初の背景

国連が「ESD の 10 年」として、2005 年から 2014 年まで国際的に持続可能な社会づくりへの取り組みを行ってきたことを始め、研究開始当初の時点において、世界各国における ESD の理論的・実践的研究は喫緊の課題であった。特に幼児期は共生的な感性の土壌を育む重要な時期であり、2015 年の OMEP(世界幼児教育・保育機構)の総会・大会宣言では、2030 年を目安に保育者養成・保育実践のカリキュラムに ESD を組み込むことが目指されていた。その一方で、幼児期の ESD は他の学齢期に比してその理論的・実践的研究が不足していことも指摘されている状況であった。

ESD は教育を競争的な原理から共生的な原理へと転換しようとするものであり、ある特定の教育方法によってそれをグローバルに実現しようとするものではなく、それぞれの地域の状況や文化に即して、理論化し、実践していくことを目指すものである。このため、ESD の実践理論の構築のためには、それぞれの国や地域が置かれた状況のなかで、どのような教育へのアプローチが持続可能な社会の実現のために必要であるかを検討した上で行われる必要があった。さらに、幼児教育の場合は、知識や技術の教えこみではなく、生活上の興味を出発点とすることが第一とされており、その特性に見合った形での実践が行われる必要がある。このような背景を踏まえ、本研究が日本の実態に即した実践理論の枠組みとして着目したのが、「生態想像力」の涵養という視点であった。

日本の保育・幼児教育では、これまでも「自然」や「生活」を通した教育の理論・実践が蓄積されており、このような教育文化は ESD の理念と重なり合う部分を持っている。一方、日本の幼児教育では、幼児の「生活」の価値を強調する反面、幼児の日常生活の背景にある社会システムとの関係や、異なるコミュニティとの交流が問題になることが少なかった。日本における幼児期の ESD 実践理論の構築においては、「生活」の経験から、「生活を成り立たせているもの」へと着想を広げる想像力が必要とされると考え、「生態想像力」の概念を用いた実践理論の構築はそのような課題に応える上でも、有効な手だてとなると考えた。

## ２．研究の目的

本研究では、「生態想像力」の概念を導入することによって、日本の保育・幼児教育の特性に即した ESD 実践理論を構築することを目的とした。

まず理論面では、「生態想像力」概念を、幼児期の ESD 実践の理論に応用可能なかたちで再構築することを目指した。これまで「生態想像力」概念は、哲学や環境人文学といった研究領域で論じられることが多く、また児童期以降の環境保全行動や道徳的判断との関係のなかで扱われてきた。そこで、まず幼児期の「生態想像力」がどのようなものであるのかについて明らかにし、さらに、これまで本邦で行われてきた「生活」や「自然」を通した保育実践の文脈のなかで「生態想像力」がどのように位置づくのかを検討することで、ESD 実践の基礎となる概念を構築することを目指した。

また、理論的な概念を、フィールド調査で収集した事例と照らし合わせることによって、「生態想像力」の教育実践理論としての精度を高めることを目指した。自然体験や生活文化体験に力を入れている園を精選し、それらの園の実践のなかで、幼児たちが実際にどのような仕方で生態想像力を発揮しているかを明らかにすることを目指した。

## ３．研究の方法

文献研究を通して、①幼児期における生態想像力の意義、②想像力を通した教育諸理論と生態想像力理論との関係、③日本の教育文化と生態想像力の関係の３点について検討した。フィール

ド研究では、①国内での継続的な事例収集、②国外の実践モデルとの比較を通して、保育場面に見られる幼児の「生態想像力」について検証した。

さらに、文献研究によって得られた理論知と、フィールド研究から得られた実践知を統合し、実践理論の精緻化を図った。

## ４．研究成果

本研究では、最終的に幼児期の生態想像力を、「生きているものどうしのつながり」への想像力として捉え、ESD 実践理論のなかに導入することによって、保育者と幼児が共に環境と出会いなおし、多様なものとの出会いのなかで「生きていること」を共有していく実践モデルを構築した。

これまでも日本の幼児教育・保育のなかで自然体験や文化的体験は重視されてきたが、保育者や幼児の「生態想像力」は、そのような体験のなかで出会う身近なものが、実は複雑な「生命の絡み合い」のなかで存在しているということに注意を向け、保育者や幼児の知覚や思考、行動を変容させていく契機となっていることが明らかにされた。

幼児期の ESD カリキュラムは、自然体験や文化的体験を通して保育者や幼児が「生きているものどうしのつながり」を実感し、想像することによって展開するものである。身近なものとの出会いのなかで保育者や幼児が生態想像力を働かせることによって、生きているものが多様なものとのつながりの下にあるリアリティを実感しつつ、目の前にあるものから、目の前にないものへと想像を広げる経験が生まれていく。それは環境との出会いが保育者と幼児の相互作用のなかで多様に展開しながら、幼児が共生的な経験を深め、広げていくことを導く実践として言い換えることができる。

以上の生成発展的なカリキュラムを展開していくためには、保育者が身近な環境との出会いの体験において働く幼児の生態想像力と自分自身の生態想像力を省察することが必要になる。そのための実践ツールとして、本研究では生態想像力を「線」として描き、マップ化する手法を開発した。このマッピングの手法は、保育におけるものや生き物との偶然の出会いにおいて、どのような生態想像力が働いていたかを省察するとともに、その省察によって新たな生態想像力を働かせるものである。中央に出会ったものを書き込み、横軸に時間を、縦軸に遠近を置いて、「生きているものどうしのつながり」に関わる幼児の言葉や保育者自身の想像を書き込んでいく形で使用する。本実践ツールは、生態想像力の理論と保育実践を接続する上で重要な位置づけをもつものであるが、理論との整合性や実践的な使いやすさの点で改善の余地を残している。保育実践者との協働のなかで、さらにツールを洗練していくことが今後の課題である。

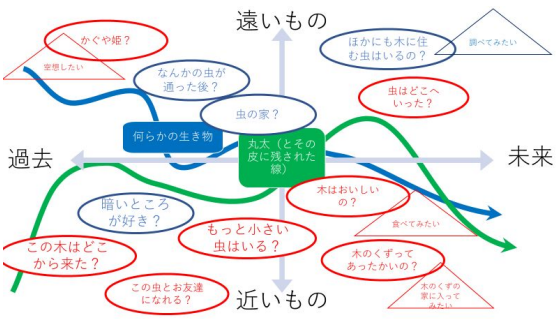


図１　生態想像力のマッピングの例

（戸外遊びにて丸太の皮をめくって遊んでいた幼児が丸太に謎の筋道を発見した事例について、生態想像力を線として描いたもの）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山本一成 | ４．巻<br>2 |
| ２．論文標題<br>生成発展カリキュラムにおける想像力の位置づけについての考察―デューイとルソーの想像力概念を通して― | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>樟蔭教職研究 | ６．最初と最後の頁<br>53-61 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山本一成 | ４．巻<br>69 |
| ２．論文標題<br>「生きていること」の共有としての教育 ―ティム・インゴルドの「線」概念による幼児期の自然体験の考察 | ５．発行年<br>2020年 |
| ３．雑誌名<br>滋賀大学教育学部紀要 | ６．最初と最後の頁<br>35-44 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>山本一成 |
| ２．発表標題<br>保育における想像力概念の再考 |
| ３．学会等名<br>日本保育学会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山本一成 |
| ２．発表標題<br>子どもが「生きていること」を共有するとき―ティム・インゴルドの「線（lines）」概念を手掛かりに |
| ３．学会等名<br>日本乳幼児教育学会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山本一成 |
| ２．発表標題<br>保育と生活体験 |
| ３．学会等名<br>日本生活体験学習学会（地方セミナー） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山本一成・嵩倉美帆 |
| ２．発表標題<br>幼児期の想像力と教育の関係について ―デューイとルソーの想像力概念を通して― |
| ３．学会等名<br>日本保育学会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山本一成 |
| ２．発表標題<br>幼児期の持続発展教育における生態想像力の意義についての考察 |
| ３．学会等名<br>日本乳幼児教育学会 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>山本一成・森本信也 |
| ２．発表標題<br>保育場面における生態想像力についての研究 |
| ３．学会等名<br>日本保育学会 |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Issei Yamamoto |
| ２．発表標題<br>Children's ecological imagination from commonplace things: education for sustainable development as becoming |
| ３．学会等名<br>Pacific Early Childhood Education Research Association（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>Issei Yamamoto & Hiraku Nakamaru |
| ２．発表標題<br>Visualizing ecological imagination toward education for sustainable development in early childhood: mapping the meshwork of lines |
| ３．学会等名<br>OMEP Asia Pacific Regional Conference（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

〔図書〕　計2件

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山本一成(編) | ４．発行年<br>2019年 |
| ２．出版社<br>七猫社 | ５．総ページ数<br>148 |
| ３．書名<br>領域「環境」の理論と実践 | |

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>山本一成（編） | ４．発行年<br>2018年 |
| ２．出版社<br>七猫社 | ５．総ページ数<br>160 |
| ３．書名<br>保育原理 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|
| 研究協力者 | 嵩倉　美帆<br><br>(takakura miho) | | |
| 研究協力者 | 森本　信也<br><br>(morimoto shinya) | | |
| 研究協力者 | 中丸　創<br><br>(nakamaru hiraku) | | |